

# 被災地支援活動を通して育成された社会人基礎力（2）

－活動後のさらなる支援活動の展開－

菅瀬 君子、長谷川 えり子、瀧本 幸子、高柳 友美  
愛知学泉短期大学

## Fundamental Competencies for Working Persons Developed Through Volunteer Activities in Disaster Stricken Areas (2) － Afterwards Further Support Activities －

Kimiko Sugase, Eriko Hasegawa, Sachiko Takimoto, Tomomi Takayanagi

キーワード：被災地 Disaster Stricken Areas、 ボランティア Volunteer、  
社会人基礎力 Fundamental Competencies for Working

### 1. はじめに

被災地支援活動を通して育成された社会人基礎力（1）準備から当日の支援活動の展開においての報告より、次のような成果を得た。準備過程では失敗ができない現地での活動を想定して、主体的に子供たちと上手に接する経験を積み自己技術のスキルアップを目指す事で活動への意識が高まり、保育所では自分たちが東北の子供たちのためにもっとたくさんの支援をしてあげたいと強く感じ、また、高齢者施設では高齢者の方々とコミュニケーションを図る事ができ、全員の心が一つになる事で絆の大切さを実感した。このようなチームワークを通して行った学習実践により、個々の主体性や責任感が身に付き、それぞれに課題発見力や状況把握力などの社会人基礎力の能力要素の育成が図られ教育成果が得られた。学生たちが当初設定した「被災した方々にたくさんの笑顔届け、温かい気持ち共有したい」という目的が実感できたのは、相手の気持ちを大切に、尊重する気持ちをもって意思の疎通が図れたからである。その気持ちがさらに学生たちを突き動かし、次なる活動へのアクションを起こさせた。

本報では、（1）の報告での展開の検証を踏まえ、活動後のさらなる支援の内容を検討し、学内外でできる支援活動の展開とその内容、そし

て、自分たちの活動を後輩へと引き継ぎ支援を継続するための提案内容についてまとめた。

さらには、社会人基礎力育成支援プログラムの一環として取り組んできたため、その効果を検証するためのアンケート調査を実施し、結果から得られた教育効果、育成結果について報告する。

### 2. 方法

#### （1）対象

（1）の報告と同様、分野の異なる2つのゼミ生（30名）である。30名を4グループに分け、各グループのメンバー構成は7人～8人とし、それぞれのゼミ生を均等配分した。相談役として教員2名、研究補助員2名が各グループに配置した。4グループは、①支援活動報告書冊子作成グループ、②支援活動展示パネル作成グループ、③被災地への感謝の贈り物制作グループ、④社会人基礎力の検証グループとした。各グループ別に活動目標を設定し、作業計画については、リーダーとサブリーダーが中心となり調整を図り作業を進め支援活動を展開した。

アンケート調査は、社会人基礎力12の能力要素について、活動を通して身についた能力要素の検証を行った。

### 3. 結果

被災地での支援活動を全て終え、宿泊先での夕食後、各ゼミのリーダーが中心となり、今回の活動の感想や社会人基礎力 12 の能力要素のうち発揮できたものについて、アンケートを実施するなど積極的な行動が見られた（写真 1）。そして、後期の授業が始まると同時に、2つのゼミで反省会を行い、被災地への今後の支援について話し合いがもたれた。全員が今後も支援を継続していくことを決めた。話し合いの結果、①報告書冊子作成、②展示パネル作成、③被災地への感謝の贈り物制作、④社会人基礎力の検証の4つの支援を行うことを決め、支援活動が再スタートした。



写真 1. 宿泊先での反省会の様子

#### (1) 報告書冊子作成グループ

被災地の子供たちや高齢者の人たちとの交流活動の様子や想いを多くの人に発信することで被災地支援に繋がると考え、グループでどのような構成にするかなど話し合い、活動までの準備、現地での活動の記録、一人ひとりの感想を1冊にまとめた（写真 2）。



写真 2. 冊子編集ワークの様子

表紙に使用した写真は、皆が最も衝撃を受けた気仙沼鹿折地区に漂流した全長約 60 メートルの大型巻き網漁船の写真にした。冊子のページ数は 40 ページである（写真 3・4）。



写真 3. 冊子の表紙とレイアウト



写真 4. 報告書冊子作成グループ

この報告書は、被災地での活動先である宮城県気仙沼地区 2 か所の保育所、高齢者施設、宿泊先ホテル、表敬訪問をした岩手県大船渡市市役所、岡崎学生フォーラム展示ブース訪問者、その他関係者に配布した。

#### (2) 展示パネル作成グループ

東北の方々が震災にも負けず、強く生きている姿を伝え、支援の輪を広げたいという思いで、パネルを作成し、学内での展示、学外での催しに積極的に参加をし、被災地の現状を発信した。内容は、保育所、高齢者施設での活動の様子、被災地見学の様子と感想などで、パネル 7 枚にまとめた。

学内での展示においては、本学の学生、オープンキャンパスに参加した高校生や保護者、企業の方、留学生らが日本で起きた未曾有の災害の様子に関心を持ち見てくれた。

（写真 5・6・7・8）。



写真 5. パネル作成の様子



写真 6. 展示パネル作成グループ



写真 7. 生活デザイン総合学科  
ファッションショー会場での展示の様子



写真 8. 第 13 回学生フォーラム  
会場での展示の様子

### （3）被災地への感謝の贈り物制作グループ

東北でお世話になった施設に気持ちのこもったプレゼントをしようと話し合った結果、クリスマスツリーを贈ることになった。クリスマスツリーのオーナメントはすべて手作り、それぞれのゼミの特徴を活かし、情報スキルを学ぶ菅瀬ゼミ生は、パソコンのお絵かきソフトでイラストを作成しカラーで印刷をし、フィルムコーティングしてオーナメントを作った。ファッションスキルを学ぶ長谷川ゼミ生は、フェルトの布に、スパンコールやビーズで飾りオーナメントを作った（写真 9）。



写真 9. 手作りのオーナメント

このツリーには、今後も「絆」や「つながり」を持ち続けたい、「私たちはみんなの事を忘れないよ!」という気持ちが詰まっている（写真 10）。

クリスマスツリーの贈り物のお礼に、二つの保育所と老人ホームからお礼のメッセージが届いた（写真 11・12・13）。手紙には、サプライズプレゼントに、みんなが大喜びしてくれたこと、今までで一番華やかな楽しいクリスマス会になったことが書かれていた。



写真 10. 感謝の贈り物制作グループ



写真 11. 新月保育所の園児より  
お礼のメッセージ



写真 12. 松岩保育所の園児より  
お礼のメッセージ



写真 13. 特別養護老人ホーム恵潮苑より  
お礼のメッセージ

(4) 社会人基礎力の検証グループ

社会人基礎力の検証グループは、各ゼミの代表4名で構成され、①社会人基礎力グランプリ大会 2014・中部地区予選大会出場 (2013.12.8)。

この大会で中部地区の短期大学として初めて「準優秀賞」を受賞した (写真 14・15・16)。  
②学内で行われた「愛知学泉大学・愛知学泉短期大学 社会人基礎力発表会 ～無限の可能性への道を切り開く 社会人基礎力育成グランプリ 2013～」へ出場 (2014.2.26)。「準グランプリ」を受賞した。発表テーマは、「笑顔の花を咲かせよう！東北支援活動から学んだ人間力」。グランプリ大会に向けての発表練習は、授業の空き時間、放課後を利用し、多くの時間を費やした。特に、中部地区予選大会出場においては、出場を決めたのが 10 月上旬であった。出場に至るまでには、決してすんなり出場に至ったのではない。学生達は、今からでは時間がないから間に合わない、用事がある、アルバイトがある等々否定的な理由を並べた。大小様々な問題がいくつかあったが、それらを一つひとつグループのメンバー同士、メンバーと担当教員で乗り越え解決し出場するに至った。出場することが決まってからは、発表のための話し合いが深夜までに及ぶこともあった。教員間においても話し合いを密にした。学生たちは、妥協を許さず互いに励まし合い、教員からの指示が無くても、自らが進んで練習に励んだ。その結果「準優秀賞」、「準グランプリ」という成果につながった。



写真 14. 発表スライドデザイン (左)

写真 15. 発表の様子 (右)



写真 16. 中部地区予選大会出場  
テーマ:笑顔の花を咲かせよう！



### （5）後輩へ引き継ぐ東北被災地支援

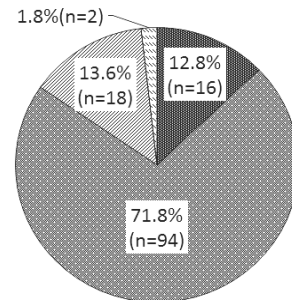
学生たちは、現地へ行き、復興はあまり進んでいないという感想を持った。また、大船渡市長を表敬訪問した際、「東北を訪れるだけで、活性化につながる」という市長の言葉を思い出し、「本当にこれで終わりにしていいのか・・・」という気持ちがさらに生じ、一部の学生が支援するのではなく、みんなが支援する体制がとれないか、学科で共有できる授業はないかと話し合いを持った。この学科の特徴は、自分の興味がある科目を選択し履修するカフェテリア履修方法を採用しているため、130人いれば130通りのカリキュラムで2年間学ぶため、同じクラスで同じ人と同じ授業を受けるということはない。そのため友達も作りにくいという欠点もあり、そのようなことも含め話し合いの結果、自分たちの学科の「ボランティア活動」科目に着目し、この科目を科全体で共有できないか、担当教員に東北支援活動をボランティア活動の授業に組み込んでもらえないか相談した。「ボランティア活動」は、生活デザイン総合学科のカリキュラムである「特別フィールド」の「学外体験ユニット」に配置されている科目である。学生自らが発信する授業を展開したいという熱い想いを担当教員がくみいれてくれ、学生の企画が次年度の「ボランティア活動」の授業に採用されることになった。しかし、短大であるため、2年生は3月には卒業してしまう。どのようにしたら自分たちの想いを次へ繋げられるかを考え、1年生130人に向け東北支援活動のためのガイダンスを実施した（写真17）。



写真17. 1年生に向けて東北支援活動ガイダンスの様子

ガイダンスの内容は、保育所と高齢者施設で

それぞれのゼミが行ったものづくりを通しての交流の様子や感想、被災地を見て、聴いたことをまとめた。特に仮設住宅が小学校のグラウンドに立ち、震災から2年半経過してもなお仮設が撤去されず、子供たちが運動場を駆け回ることもできない現状について話し、子供とのつながりを持つことを最優先に、次年度は気仙沼市内の児童、保育所の幼児との交流を決定した。自分たちが支援してきた活動を、後輩のみんなに受け継いで、継続して行ってほしいことを話した。1年生は熱心に2年生の話を聞き入っていた。そして、1年生に対し、東北被災地への支援活動についてアンケートを2月に実施した。アンケートの質問項目は2つで、1) 東北被災地支援活動への参加意思について、2) 「被災地支援プロジェクト」を立ち上げた場合、そのプロジェクトのリーダーとして参加したいと思いますか?である。いずれも、①大変ある・思う、②ある・思う、③あまりない・思わない、④まったくない・思わない、の4段階評価である。1) 東北被災地への支援活動に参加したいと思いますか?の問いに対しての結果を図1に示した。大変ある12.8%、ある71.8%、あまりない13.6%、全くない1.8%であった。参加したいと思っている人が全体の84.6%おり、震災から3年経過したが、今なお被災地へ行き支援をしたいと思っている人が多いことが分かった。

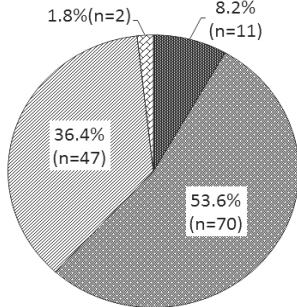


■ 大変ある ■ ある ■ あまりない ■ 全くない

図1 東北被災地支援活動への参加の意思

2) 「被災地支援プロジェクト」を立ち上げた場合、そのプロジェクトのリーダーになり参加したいと思いますか?の問いに対しての結果を図2に示した。大変思う8.2%、思う53.6%、あまり思わない36.4%、全く思わない1.8%であった。プロジェクトに参加したいと思っている人が全体の61.8%いた。被災地への支援活動

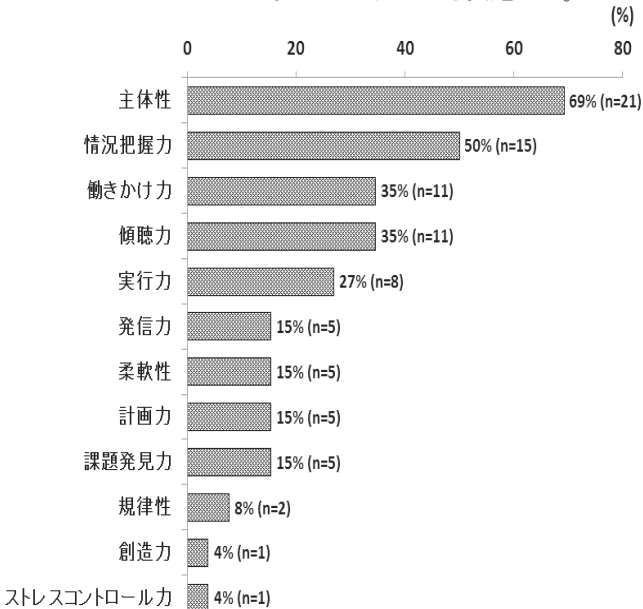
に参加したいと思っている 84.6%のうち、68.5%の人はプロジェクトにも参加したいと思っていた。130 人のうち、被災地へ行き支援活動に参加したいという意思を強く持ち、なおかつ被災地支援プロジェクトのリーダーとして大変参加をしたいと回答した人が 8 人いた。先輩の体験談を聞き先輩たちの想いを引き継ぎたいと思う強い意志の表れと被災地に支援したいという強い想いが伺い知れた。



■ 大変思う ■ 思う ■ あまり思わない ■ 全く思わない  
**図2 東北被災地支援活動プロジェクトのリーダーになりたいですか**

(6) 育成された社会人基礎力 12 の能力要素

被災地支援活動を通して、準備から当日の支援活動の展開および活動後のさらなる支援活動の展開において一連の活動が終え、後輩へ被災地支援活動のバトンが引き継がれるまで、育成された社会人基礎力 12 の能力要素について、2つのゼミ生 30 人にアンケートを実施した。



**図3 東北被災地支援活動を通して身についた社会人基礎力 12の要素**

社会人基礎力 12 の要素のうち最も発揮できた要素は「主体性」で 69%であった。自ら行動を起こして積極的に取り組むことができた。次に発揮できた要素は「状況把握力」で 50%であった。自分と周りの人との関係を理解し、自分がどのような役割を果たせばよいか考えて行動できた。主体性が身についたと思えた背景には、一人ひとりが東北の被災した人たちのために自分にできることをしてあげようという気持ちを常に持ち一連の活動を行ってきた表れであると推察される。状況把握力が身についたと思えた背景には、今回の活動はすべての活動がグループ活動であり、チームで協力し合うことの大切さを十分理解し自分の役割をきちんと把握できていたからこそ発揮できたものと推察される。その他の要素としては、「働きかけ力」、「傾聴力」が 35%、「実行力」27%であった。今回のアンケートからもわかるように、東北被災地への支援活動は、12 の能力要素すべてが発揮できた活動であったといえる。

4. まとめ

今回の活動過程において問題がいくつか生じた。それを解決していく中で、最も身についた社会人基礎力は主体性であった。被災地を継続して支援したいという前向きな意見が出され、自分たちの活動を後輩たちへ引き継ぐ準備や学科に置かれている「ボランティア活動」科目に被災地支援活動を組み込み、東北への支援とつながりを今後も継続していくことが検討されるなど、受動的ではなく、能動的な行動特性として社会人基礎力が発揮された。今回の東北被災地への支援活動は、グループワークによる課題解決型 (PBL) の体験型学習である。社会人基礎力 12 の能力要素のみならず、一人の人間として成長することができ、そして、子供たちや高齢者の方々から、命の大切さを教えていただき、今後の生き方を考えるきっかけとなった。

この支援活動は、生活デザイン総合学科の後輩へと引き継がれ、平成 26 年 8 月 19 日～22 日の日程で、①宮城県気仙沼市大島小学校体育館にて、児童や近隣の保育所幼児らを対象に、ゲームやものづくりの体験などで交流が持たれ

た。②岩手県大船渡市の、轆轤石（ろくろいし）仮設住宅、大立（おおたち）仮設住宅の住民との交流が持たれた。その他、大船渡津波伝承館にて語り部による津波映像の解説と被災体験談、震災時の心得など充実したプログラムが実施され、先輩の想いが後輩へ確実に引き継がれた。

本研究の一部は、2014年（一社）日本家政学会年次大会にて研究発表を行った。

謝辞 今回の東北被災地支援活動を実施するにあたり、愛知学泉短期大学同窓会、気仙沼市立松岩保育所、気仙沼市立新月保育所、気仙沼市恵潮苑の皆様方、安城学園高等学校坂田成夫校長、愛知学泉短期大学稲垣みかげ教授、木村典子准教授に温かいご支援をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

#### 参考文献

- ・学校法人安城学園社会人基礎力育成室編：「無限の可能性への道」（2012）
- ・経済産業省編：「社会人基礎力育成の手引きー日本の将来を託す著者を育てるためにー」（株）朝日新聞出版（2010）
- ・石川順一著：「週末は東北へー災害ボランティアブッカー」平凡社（2011）
- ・杉浦大悟著：「21人の輪ー震災を生きる子どもたちの日々ー」NHK出版（2012）
- ・山口昭男著：「3.11を心に刻んで」岩波書店（2012）
- ・溝口明秀著：「明日へ東日本大震災命の記録」NHK出版（2011）